

二八、泥棒と労働

一八九二年十一月パリのアナキスト機關紙『叛逆』(La Révolte)に『労働と泥棒』という論文が掲載された。この新聞を主宰していたジャン・グラヴィが不在だったので、その留守を引受けたポール・ルクリュ(エリゼの甥)が書いたものであつた。これを見てジャン・グラヴィは非常に驚いてエリゼ・ルクリュとクロボトキンとにその不満を訴えた。先ずその問題の文章の中から結論を摘録しよう。

「現在のわれわれの社會にあつては、泥棒と労働とは本質に於て異つてはいない。そこには生活獲得の正直な方法即ち労働と、不正直な方法即ち泥棒とがある、という主張に對しては私は反對する。」結論として「われわれが理想する生活々動は、今日労働と名づけられるものにも、また泥棒と稱せられるものにも、同様に遠く隔つてゐる。即ち要求せずに物を取ること、それは泥棒ではない。その能力や活動を用ゐることは、それは労働ではないであらう」

これに對しエリゼ・ルクリュはジャン・グラヴィに宛てた次の手紙に添えて、次の文章を送つた。
わが親愛な友

『泥棒と労働』の論文に關して君が衝激を受けたことは僕にも解る。しかし僕は驚かない。なぜなら、この論文は、人をして考えさせるものであるからである。そして問題を一層深く掘り下げしめるような、こうした論理を聴くことを僕は厭わない。僕等のやうな道德主義者に對して、われわれも亦泥棒や掠奪を以て生きてゐるのだということを、思い起させるといふことはそれは悪いことではない。僕はこうした批評を侮辱として取らないで、瞑想すべき課目と考へる。われわれが住んでゐる非正義ないんちきな社會に於て、われわれは、兎も角も、そこに起るすべての惡に對して連帶責任を持つ。われわれは革命によつて、それを清潔にすべきだ。それ以外に道はない。

御自愛を祈る

エリゼ・ルクリュ

次は『叛逆』に掲載したエリゼの文章。

金錢だけがパンを與える、不平等と集奪とを基礎とするこの不公平な社會に於ては、われわれ

れ、すべては例外なく、われわれの生存状況そのものに從つて、全き盜奪を以て生活すること
を餘儀なくされる。あたかも怒れる狼のように、われわれは毎日の食糧をより弱いものの負擔
に於て爭奪する。われわれの食うパンの片々は他の貧しいものから奪つたものであり、血の痕
を押したものである。それは眞實だ。われわれは、このことを再現してくれた『勞働と泥棒』
の筆者に感謝する。しかし、われわれはこの恐ろしい社會狀態の外に出て、われわれの生活方
針を立てよう。そして或人は引ずられることのあるべき貧困と恥辱とを諒解しまた説明して、
何よりも先きに、調和の社會に先行するこの腐敗隨落の惡時代を短縮することに努力すべき
だ。われわれが、われわれのこの方針のために個人的犠牲を拂えば、それだけ、われわれは
相互の愛情によつて同志の信用を博することができである。われわれの敵に對して、われ
われが自尊すればするほど、われわれの解放の日は近づくであらう。いまは叛逆の奴隸が喜ぶ
ようなけちな策術しか見られない。われわれに必要なことは、主義に就ての矜持の強力さ、態
度の雄健さ、生活の高潔さである。次號に於て、われわれの一人がまたもう一度この問題に就
いて、できるだけ明確にわれわれの思想を確立すべく試みるであらう。

なお前掲のグラージに宛てた手紙に數行の附言あり。曰く

ピエール（クロボトキン）が君と同じ意味のことを書いて、なお次號に一文を書くことを約束した。僕は、
變遷を指導すべく次の數語をボールにも書き送つた。曰く『辛棒だ、時の長さよ』

かくて一八九一年十二月五日から十一日にわたり、『叛逆』紙上に『も一度道德に就て』とい
う論文がピエール・クロボトキンによつて執筆された。

二九、エリゼ・ルクリュと暴力問題

この一文は七八年前にパリで死去したアン・リネエルが『種蒔く人』紙のルクリュ號に寄せたものである。アン・リネエルの本名はアンリ・ネエル (Henri Neel) で、現在の桶仙人デイオゲネスと綽名された哲人である。個人主義的無政府主義者として若干の著書もあり、徴兵反抗運動の精神的中心人物となつていた人である。

一八七六年から死に至るまでの三十年間、エリゼ・ルクリュは判然と無政府主義者たることを標榜した。彼は自ら進んで『無政府主義的教育者』と稱していた。彼にとつて教育は進歩の唯一の方法であつたろうか、そしてあらゆる暴力を排斥したのであるうか？ それに對して彼はその著『進化、革命及び無政府主義思想』の中で答えている。また私は彼の書簡の中に彼のこの方法に關する答えに對する面白い補足を發見する。

この答え——それは私の意見やまたマニユエル・デウヴルデスの意見に全然一致するものでは

ないが——の中で、私はその深い美しい眞面目さと、彼の氣高い平衡のとれた精神狀態に於て、半ば鎮めることの出来ないあの痛烈な不安を愛する。

彼の博識な、立派な理論は世間周知の處である。即ち「進化」と「革命」とはある同一現象の二つの場合である、と彼は言う。凡ての進化は、いつか爆發するであろう處の革命の動機の堆積である。あらゆる革命は、新しい進化の始めであり、未來の革命のための準備である。

しかしながら注意せよ！ 同じく進化と云つても、頽廢と稱する進化もあり、同じく革命と云つても、死である革命もある」

しかし吾々の心を洗ひ清めよう。そこからこそ「非科學的な、無益な、復讐の思想」から切り離された未來の革命が生ずる。

しかしまた注意せよ。「現在までいかなる革命も完全に自然發生したものではなく、そのためにいかなる革命も完全に勝利を博さなかつた。それ等のあらゆる大運動は、例外なしに多少とも何人かに指導されたものである。そのためにこれ等の大運動はその指導者達のために成功したのみであつた。」

完全に自然發生である革命、エリゼ・ルクリュの眼にも私の眼にも眞に價值ある革命は、果し

てなお暴力を必要とするであらうか？ 彼はその必要を信ずる。そして私はそれを信じない。ここに吾々の別れる一つの原因がある。

更にまた、次の點もその原因の一つである。エリゼ・ルクリュは効果がないと知りつつもある防禦的暴力に賛成する。「市民の自尊心は、或る場合に於ては、防柵を築き、その土地、その町、その自由を防禦することを彼等自身に要求する」と言い、その次に直ちに次の如く補足している。「しかしながら弾丸のまぐれ當りで、どんな小さな問題をでも決しようと思つてはならない。變化が行われるのはまず、頭腦と心臓に於てのみである。」吾々はこれに對して全然賛同するか？ 否。彼の言葉はまだ終つてはいない。「……筋肉を張り、歴史的現象に變化する前に。」と補足している。

大抵の場合、彼もまたトルストイ同様、絶対に個人的暴力を排斥するように思われる。理論に於ては彼は「凡ての被壓迫者、凡ての不幸な者、凡ての、太陽と空氣と自由と、或は勉學とを奪われている人間、あらゆる、生活を或は權利を迫害されている人間、それ等の人間は凡て壓迫者に對して手を舉げる權利を持つている」と斷言している。——私が「赤いスフィンクス」中にそれを斷言したのと同様に、明瞭に。しかし彼はこの權利を行使しない者を些かも非難しようとは

しない。即ち「善意が、人間的同情が、連帶の精神が、それを妨げるのだ。」一方その權利を行使する者に對してはエリゼ・ルクリュは興味を持たない。即ち「かくの如き叛逆はある新聞雜報的の價値しかない」と言つてゐる。

一八九二年に、この問題は明確に、そして悲しむべき現實性を以つて提出された。何んという法官の家にだか忘れてしまつたが、投じられた爆弾は、例の通り、狙われた人物を逃がして、他の人々を殺し、家を破壊した。エリゼ・ルクリュは始めこの事實を警察の仕業だと思つていた。ともかくもこれ等の「爆發的空想」を「自覺した無政府主義者に、言行一致を心掛け、自分の行動に對して全人類に責任を感じる無政府主義者に」歸することは出来ないとは彼は言つた。そして事實を知つた時、彼は「ラヴァシヨルの氣高い性格」(ラヴァシヨルのことは『新大學の創立』の章、△アナキストの復讐の項に紹介してある……石川)を讚美し、彼を「一つの偉大なる人物」として明言し、その上なお「類のない豁達さを持つた英雄」だと言つた。併し彼はこの華やかな手本に酔わされた人々に對しては憤慨していた。「暴力的方法のみが眞面目だということは、おゝ！ 否、それは怒りがいかなる理性よりも最も眞面目なものであるというのと同様である。」と。そして彼は實際に「衝動的暴力」を排斥した。この無心の暴力は、「不正義によつて正義へと急ぐ。そし

て『血』を見る』と一八九二年六月七日にリリイ・デブランに書き送った。そしてまた六月二十八日には、公けに、リブルンの『サンブル・アヴァンティ』紙に書き、「例えば人類の連帯性」というような理由によつて決定することなしに、自ら主我的の審判者である必要があるか？」と疑問を發してある。

これ以上エリゼ・ルクリエを押して、吾々自身がゆく處まで引張つてゆくのは遠慮しよう。あるトルストイ主義者である過信者が、彼に、不幸な虎の飢を癒すために自分の體を食われるままにしていた佛陀の物語りを聞かせた。すると、彼は「その寓話は解る、しかし佛教徒達は、ある日若し虎が一人の子供に飛びかかつてこれを食い裂くのを佛陀が見たとして、それをもなすがままに放任していたということは語らない。私としてはそんな場合、佛陀は虎を殺したに違いないと信ずる」と答えた。これはそれより九年或は十年前に書いたこと、即ち「私は獸とか人間とかの殺害を言うのではない。私はその防禦が個人的であるか、社會的であるかによつてしか差別をつけない。私は虎を殺して道伴れを防禦する旅行者を赦す。私はまた人間の社會に於て、これに相當する行爲を遂行した戰士を赦す」と言つた言葉に相應するものである。

勿論、私も若しその暴力がいい意味のものであれば赦す。何故なら誤謬は人間のものだから。

ら。社會に於て、虎を除く行爲を遂行することを以て任ずる者が、若し人間に對してその矢を向けるならばそれは常に誤謬である。ここでは虎は自然のものではなく、職分によつて造り出されたものだ。寧ろ虎とは職分そのものだ。

「主人を造るには制度があれば足りる」と、かくも明確に書いている。エリゼ・ルクリエが、なんでそれに氣がつかないものか。一人の大臣或は一人の大將をたおすことは、政府という虎、あるいは軍隊という虎を破壊することではない。社會的の虎をわれわれに恐れしめるものは、それがわれわれの手でつかめない空虚とした幽霊であり、吾々の物質的の打撃で傷けられないものだからである。社會の虎を滑稽にするものは、それが虚偽と、盗んだ力によつて造られた幽霊でしかないことである。吾々が十分な人數になり、笑い乍らその虎をみ、彼のために打つことも虚を言うことも拒否する時、その社會の虎は、吾々の眼の光りの前に、吾々の正しい笑いの前に、また吾々の勇敢な拒否の前に消滅するであろう。かくて既に吾々の目前に、吾々の健全な嘲笑の前に、宗教の強制的權力は消滅したのである。この幽霊の代表者達を襲撃することは、寧ろ、世界に存在する暴力の量を増し、暴力の權能を大ならしめ、不徳義な法律及び、現在の幽霊の勝利を益々強固ならしめるのみであり、或はまたもつと凶惡な幽霊を以つて代らしめることしか出来

ない。若い幽霊達はより以上に凶悪だ。そして彼等はより以上の物質的抵抗におつつかる。そして彼等は希望の虚偽をもたせざる。即ち熱情的な心は何物の前にも後退しないで、テロリズムを組織する者達に賦與される。

エリゼ・ルクリュは「衝動的暴力」を排斥する。何故ならそれは『正義に急ぐ爲に不正義を以てする』という無頓着さを持つてゐるからである。いつになつたら吾々は次の如き事實とその結果とに氣がつくであらうか？ 即ち、革命的暴力は、それ自身がより確固たる規律を持たないならば、保守的規律に始めから克服されているのだ。だからこの暴力が自由に向つて投じられれば、隸従は更らに増すのだ。ここに於ては方法が目的を破壊してゐる。その崩壊が一時的のものであると言つてはならない。権力の必然的傾向は、益々強固になり、擴大することになる。権力に對して、暴力的方法を行使するうちは、その権力はより壓制的な権力によつてしか顛覆され得ない。現在及び過去を見よ。若し「衝動的暴力」の動作が、エリゼ・ルクリュが言明する如く、雜報的の重大さしか存しないとすれば、革命的暴力の動作はもつと重大であつて、それは歴史上のより有害な厭惡事に屬するものである。

△ルクリュとアン・リネール

アン・リネールはルクリュの消極的暴力説に以上の如き批評を加えてゐる。アンリは暴力の絶對的否定者であるが、ルクリュは弱者が暴力的侵害を加えられる場合には、暴力を以て防禦せねばならぬと主張する。それに就て些か私の考えを述べて見たい。

第一にルクリュとアン・リネールとは時代が違ふ。しかしその時代論になると個人的比較論の傾向がなくなるから、それは止める。

第二にルクリュは廣く自然を見た人である。自然の一部分としての人間觀が彼の思想に滋味と生氣と豊富さと美とを與えたのである。アン・リネールの思想は徹頭徹尾主觀的であつて自然には係わらない。「私は主觀的世界、自我そのものしか決して知らないであらう」とは、彼の第一教義である。ソクラテスや、孔子の言をその儘に服膺するのである。「聖者は氣強く。物質的進歩は、一方に人間的慾求を増し、他方に勞働を増すことを目的とするものであることを。聖者から見れば、物質的進歩は人類を泥濘と苦痛の中に益々没入せしめる重さの増加に外ならない。機械の發見は常に勞働を危地に陥れた」とアン・リネールは説く。しかるにルクリュは、直ちに、

その泥濘その苦痛から此世界を解放することを考え、機械の弊を轉じて人類の幸福の爲に用いしめようと努力する。ルクリュがその大著『人間と地球』の最後の結論の結語は「幸福とは人が自己の欲する一定の目的に向つて進むという意識にある。吾等の起源、吾等の現在、吾等の近き目的、吾等の永遠の理想を達観し、體驗して、地球そのものと一體になり、又、人類一體の意識を確つかり握り、人類や動物や植物やの各自の生活に適する様にその環境を分配し整理し、吾等の庭園即ち地球を耕作し吾等を圍繞する陸と海と大氣とを整理する。乃ちかくの如くにして始めて進歩は行われるのである」である。アン・リネールの消極的なに對してルクリュは積極的である。こうした傾向からして、暴力に關する見解も異つてくる。

もし暴威を揮う虎が聖者を食ひに來た場合に、聖者は自己をその虎に與えるかも知れないが、虎が小兒を食わうとする時にはその虎を防いで、小兒を救うであらう。とはエリゼの考えであつた。社會生活上に於ける人面の虎に對しても同様である。しかるにアン・リネールは、その虎というは職權であつて人ではない。手を以て把握し得ないファントムである、と言つてゐる。暴力で防ごうとしても防げるものではないし、その職權に罪があつて、その人に罪はない。その人は

暴力によらず、教育方法で改められる。また、精神的に改めねばならぬ、というのである。

ストイック主義者たるアン・リネールは自然的人間生活を全然眼中に置かないで、絶對的主觀の律法を以て一切を處置しようとする。

個人主義者たるアン・リネールは、虎の役目を演ずる個人の責任を重視してこれを職權というようなファントムに歸すべきではない筈だ。弱者に對する有意或は無意なる暴力に對し暴力を用いてこれを防止することは、人間が自然と戦う場合と異ならない筈だ。でなければ、暴力に反對しつつ却て他の暴力を是認または默認することになる。ラバシヨルの場合に於けるルクリュの態度はアナキスト同志の精神的動機を信賴した結果である。悲惨なる結果を見た時、これを警察の陰謀ならんと想像したのは、幾度も殘虐な迫害に遭遇した彼としては寧ろ當然の推測である。しかし、書齋の修道者たるアン・リネールが、此の間の心の動きを却て輕視する如く見えるのは、それも無理ではない。兩者は地位と學問と時代とを異にする。一を以て他を律する譯には行かない。

要するにルクリュもアン・リネールも、ともに暴力を厭う程度に相違はないが、不義を惡み、人類を愛する情熱に些かの相異がある。アは克己の修道者であるが、ルは多血の殉道者である。

そしてルの持つている虚無的氣分はアに皆無なのである。